

## 2018年6月3日（日）「柔和なる王子の自由」

マタイ 17:22-27

22 彼らがガリラヤに集まっていたとき、イエスは彼らに言われた。「人の子は、いまに人々の手に渡されます。23 そして彼らに殺されるが、三日目によみがえります。」すると、彼らは非常に悲しんだ。

24 また、彼らがカペナウムに来たとき、宮の納入金を集める人たちが、ペテロのところに来て言った。「あなたがたの先生は、宮の納入金を納めないのですか。」25 彼は「納めます」と言って、家に入ると、先にイエスのほうからこう言い出された。「シモン。どう思いますか。世の王たちはだれから税や貢を取り立てますか。自分の子どもたちからですか、それともほかの人たちからですか。」26 ペテロが「ほかの人たちからです」と言うと、イエスは言われた。「では、子どもたちにはその義務がないのです。27 しかし、彼らにつまずきを与えないために、湖に行って釣りをし、最初に釣れた魚を取りなさい。その口をあけるとスタテル一枚が見つかるから、それを取って、わたしとあなたとの分として納めなさい。」

### 【序論】

今日はタイトルに「柔和」という言葉を使わせていただきました。この言葉をお聞きになって、ピンとくる方もいらっしゃるでしょう。以前に学びました、マタイ 5:5 の「**柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであらう**」という、山上の説教の一節であります。これはまさしくキリストの人格そのものを語っている。もう3年前（2015年5月3日）に語った説教を読み直してみても、改めてキリスト者としての生き方が問い直されました。繰り返しになりますが、聖書的「柔和」とは、一般に言われる「やさしくおだやかなこと」とか「おとなしい」といった意味ではなく、「当然の権利として主張できるにも拘らず、自分の口を制し、弁解もせず、毅然としていること」であり、静かでありながら極めて能動的なあり方なのです。聖霊を受けた人にしかできない新しい生き方であり、人間の努力や修練によって得られるものではありません。そして、人間が心の底でそうありたいと願っている（はずの）生き方であります。

今日は、税金にまつわる話題が出てきますが、主イエスがこの地上で生きるに当たって、ご自分の権利をどのように認識し、それをどのように用いておられたかを学ぶことができます。そして、私たちも主の弟子として如何なる姿勢で生きていけばよいかが再確認されることでしょう。

## 【本論】

### 本論 1. 第二回受難予告

彼らがガリラヤに集まっていたとき、イエスは彼らに言われた。「人の子は、いまに人々の手に渡されます。そして彼らに殺されるが、三日目によみがえります。」すると、彼らは非常に悲しんだ。(17:22-23)

マタイ福音書全体では三度に及ぶ「受難予告」があります。第一回目は 16:21 で既に見ましたが、ここでの第二回目はもう少しシンプルな描かれ方です(第三回目は 20:18-19)。印象としまして、今回は(死よりもむしろ)復活に重点が置かれているように感じます。受難について時間をかけて語ってこられた主イエスは、それが死(絶望)で終わるものではないことを強調しておられる。しかし、弟子たちの中ではどうしても死ばかりが印象づけられてしまう。23 節の終わりは「**彼らは非常に悲しんだ**」と締め括られていますし、マルコとルカの並行箇所では、弟子たちがこの言葉の意味を理解できず、それを尋ねることを恐れていたと書かれています(マルコ 9:32、ルカ 9:45)。一体誰が師匠の死を喜んで聞くことができるでしょう。そうと分かっているなら逃げてほしい。しかし、主イエスは自らの意志で受難を選択していかれるのです。

ここからはいよいよエルサレムに向かっていきます。22 節冒頭に「ガリラヤ」という聞き慣れた地名があり、一行がそこに集まったということが言われている。時期的に見て、過越の祭を一週間後に控えているようですから(続く税金にまつわる問答はそのことを示唆する)、その祝いに一緒に行くために集合したと思われれます。

### 本論 2. 徴税人の訴え

さて、24 節以下は場面が変わります。このストーリーはマタイ福音書にしか出てこない特殊な記事です。

また、彼らがカペナウムに来たとき、宮の納入金を集める人たちが、ペテロのところに来て言った。「あなたがたの先生は、宮の納入金を納めないのですか。」(17:24)

「カペナウム」はずっと主イエスの伝道の拠点であった地です。そこにペテロの家があったようで、一行は今回も滞在していたのでしょう。すると、「宮の納入金を集める人たち」がやって来ました。「宮の納入金」は「神殿税」とも訳されているものがあり(新共同訳、新改訳 2017)、よりイメージがし易くなります。エルサレム神殿の維持管理と、そこで働く人々を養うために、イスラエルの成人男性から徴収されていたものです。こ

の税金は、パレスチナ在住のユダヤ人だけでなく、離散のユダヤ人にも課せられました。当時のユダヤ宗教は神殿を中心としていましたので、税金を納めることはユダヤ共同体への帰属の証でもあったのです。この伝統の元になっている出エジプト 30:11-16 を読んでみましょう。

主はモーセに告げて仰せられた。「あなたがイスラエル人の登録のため、人口調査をするとき、その登録にあたり、各人は自分自身の贖い金を主に納めなければならない。これは、彼らの登録によって、彼らにわざわいが起こらないためである。登録される者はみな、聖所のシェケルで半シェケルを払わなければならない。一シェケルは二十ゲラであって、おのおの半シェケルを主への奉納物とする。二十歳、またそれ以上の者で登録される者はみな、主にこの奉納物を納めなければならない。あなたがた自身を贖うために、主に奉納物を納めるとき、富んだ者も半シェケルより多く払ってはならず、貧しい者もそれより少なく払ってはならない。イスラエル人から、贖いの銀を受け取ったなら、それは会見の天幕の用に当てる。これは、あなたがた自身の贖いのために、主の前で、イスラエル人のための記念となる。」(出エジプト30:11-16)

ここで言われていることは、兵役に就く 20 歳以上の男子の人口調査をする際、災いが降りかからないように「命の贖い金」というものを徴収し、それが結果として「会見の幕屋」の維持管理費に当てられるということです。これがやがて、バビロン捕囚から帰還した民が神殿を再建した時から、神殿の維持管理のために適用されるようになりました。「半シェケル」というのは、およそ二日分の労賃で、現代の日本円にして1万円程度と考えておけばよいでしょう。

この神殿税はエルサレムでは居住地で徴収されましたが、それ以外の地には納税の時期が告知され、徴税所が設けられ、アダルの月（3月）の15日よりスタートしたようです。これは過越の祭が近づく時期ですから、主イエスの受難が刻々と迫ってきているとも言えます。

さて、この神殿税を主イエスは何らかの理由で納めそびれていたようなのです。恐らく、ピリポ・カイザリヤへの旅行の時期と重なってしまったのでしょう。この時代は督促状が届くのではなく、人が直接やって来た。ペテロの家に来て、未納であることを告げる。主イエスに直接言ってこないのは、この時代、ラビに会いたい人は、弟子に取り次いでもらうのが慣例だったからです。とはいえ、「**あなたがたの先生は、宮の納入金を納めないのですか**」というの、何か主イエスに対する悪意のようなものを感じる言い方です。25 節でペテロが「納めます」（原文では「Ναί」→「はい」）と答えていることから見て、主イエスがこれまでにきちんと納めてきたのを彼は見ていたのでしょう。

### 本論 3. 神の子の対応

家に入ると、先にイエスのほうからこう言い出された。「シモン。どう思いますか。世の王たちはだれから税や貢を取り立てますか。自分の子どもたちからですか、それともほかの人たちからですか。」(17:25)

主イエスは徴税人の訴えを知り、先手を打ってペテロに話しかけます。この話題が一つの契機となり、主はご自分が誰であり、日頃当たり前にしている納税にはどういう意味があるのかを教えていかれる。ここで主は、地上の王は誰に対して税を課すかという問いかけをなさっています。これは自明の理であって、王家以外の市民からという回答になる。つまり、王家に属する者には税は課せられないのです。

ペテロが「ほかの人たちからです」と言うと、イエスは言われた。「では、子どもたちにはその義務がないのです。」(17:26)

主イエスは何を言わんとしているのでしょうか。主は、地上の王家と、ご自分が王なる神の御子であることとを比較して説明しておられるのです。そもそも、神殿というのは神のものである。そうであるならば、神の子がなぜ税金を払わなくてはならないのか。本来わたしにはそのような義務は存在しないのだ。そう言っておられることになります。そして、更に拡大解釈するならば、主イエスにある共同体(弟子たち)もまた、神の子とされている今、本来税金を免除されるべき立場にあると言うのです。それにも拘らず、主はずっと税金を律儀に納めてこられた。このことは何を意味するのか。

しかし、彼らにつまずきを与えないために、湖に行って釣りをして、最初に釣れた魚を取りなさい。その口をあけるとスタテル一枚が見つかるから、それを取って、わたしとあなたとの分として納めなさい。(17:27)

主がこの世の納税システムに従う理由は、ただただ「つまずきを与えないため」と言われる。仮に主イエスがここで「俺は神の子だから納税義務はない」と言って拒否した場合、何が起きてくるか。徴税人は上役から派遣されている人々でありますから、彼らは非常に困る立場に置かれるでしょう。そして、「イエスはこう言っていました」と報告することになる。すると、イエスは神殿を冒瀆し、これに関わる一切を否定したという印象を持たれてしまうでしょう。ですから、主は雇われ徴税人の立場を<sup>おもんぼか</sup>慮り、同時に上役の誤解を避ける意味で、彼らに譲歩されたのです。このようなささいなことで彼らが主イエスの宣教の言葉に耳を閉ざしてはならないという、愛の配慮があったということです。「譲歩とは、真理を曖昧にし、妥協することではない。与えられた特権を愛や弱い人々への配慮ゆえに制限することである。」(中澤)

#### 本論 4. 釣りの意味

この箇所ポイントは掴めたと思いますが、最後の「釣り」の指示が興味深いので、少し触れておきます。実はこれにも意味があるのです。主イエスは今回の税金を決してご自分のポケットとか、弟子（ユダ）に管理させていた金袋から出そうとはされないう。そもそも、主イエスと弟子たちの収入とは何であったかと言うと、それは彼らの宣教を理解し、好意を寄せてくれる人々の献金にあったと思われるのです。主はそのお金を納税に使うことなく、ただ天来のお金をもって神殿のためにささげる方法を取られた。

ペテロにガリラヤ湖に行って（網ではなく）釣りをしようお命じになる。そして、最初に釣れた魚の口を開けると「スタテル銀貨」が入っているから、それでご自分とペテロの分を支払うようにと言われます<sup>1</sup>。デレットという注解者は、この魚はナマズであったであろうと考えます。ナマズは大きいものでは全長 1m を超えるものもあります。そして、円形の光るものに惹きつけられる性質があるそうで、口の中の隠れた部分にコインが十分入り得るそうです。

いずれにせよ、主イエスは神の子でありながら、地上における義務を怠ることなく、ご自分に属する弟子の分も含めて、天来のお金をもって支払いをなさいました。これはペテロに対する視覚教育とすることができます。つまり、これによってペテロは、自分が神に属する者であることを知るに至った。主イエスが本来持つておられる神の子としての特権を敢えて行使しないで生きておられる姿を見たのです。

#### 【結論】

今日の箇所は、主イエスがご自分の権利を敢えて制限しておられたことを描いています。主はあくまでも納税に抵抗することだってできたでしょう。しかし、それをしなかったのは偏に徴税人に対する配慮によるものだったのです。これは、権利を制限する自由です。

- ・ **ただ、あなたがたのこの権利が、弱い人たちのつまずきとならないように、気をつけなさい。**  
(I コリント 8:9)
- ・ **あなたがたは自由人として行動しなさい。その自由を、悪の口実に用いないで、神の奴隷として用いなさい。** (I ペテロ 2:16)

私たちキリスト者にも、権利を制限する自由があります。それは何も納税など金銭に関

---

<sup>1</sup> 主イエスの時代、半シェケル（2 ドラクマ）貨幣というものが存在しなかったため、二人分に相当する 4 ドラクマ銀貨一枚を出す習慣があった。

わる事柄だけではありません。その生き方のすべてが柔和であることが求められているのです。繰り返しになりますが、聖書的柔和とは「当然の権利として主張できるにも拘らず、自分の口を制し、弁解もせず、毅然としていること」であります。このような生き方の原点はどこにあるか。それは、自分が神の御前にあって何者でもないこと、神に対して権利も功績もない存在であることを知っている、真にへりくだった心から出るものなのです。私たちがへりくだって隣人に対して愛の配慮ができるように、祈りましょう。

### 【祈り】

柔和なる王、イエス・キリストの父なる神様。主イエスが驢馬の子に乗ってエルサレムに入城されたことを、私たちは思い起こします。これが果たして、終末の審判者の姿でしょうか。主イエスは地上にあってはあくまでも、この世の法に従われました。神の子としての特権を強行に主張するということはなさいませんでした。私たちにもその柔和な生き方ができるよう、この心にキリストの御霊が働きかけてください。私たちが神の御前にへりくだることこそ、その生き方の原点でありますから。

### 【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
天地の創造主にして、罪ある人類に仕える道を選び給うた、父なる神の愛。  
柔和なる王として世に降り、小さき者を愛するがゆえに、この世の法に従い給うた、主イエス・キリストの恵み。  
神の御前にへりくだり、権利を敢えて行使しない自由を与え給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。